

経営している。ご一族は地域発展に積極的に奉仕、活躍されるなどなど、小玉翁の精神が立派に継承されている。

殊に長女、妙さんのご主人の小野塚芳一さんは誠実で多くの役職に就かれた。弥栄会にも長年にわたり北海道支部長と弥栄会副会長として、慰霊と親睦団結に努力され、最近には総会資料編集など重要な責務を引受けてくださっている。

なお、昭和六十三年、小野塚さんが団長として弥栄小学校同窓の有志と共に、元弥栄村（現孟家岡）を訪ね友好に努め、弥栄及び引揚げの道をたどって慰霊の旅をされた。

平成六年八月には小玉一さんが団長となり北海道と黒龍江省との間に結ばれた友好提携展示事業に基づく訪中団に参加し、更に孟家岡を訪ねて現地の小学校と標茶の弥栄小学校との文化交流、表敬訪問をされた。松井さんは翌年、団長として再び弥栄村を訪ね、前年に引き続き友好を続け、その旅に小玉・松井夫人も同行された。

平成八年には更に一步前進し、標茶町弥栄小学校児童（五・六年生）八人が校長先生、担任教師二人に引率され、地域振興会長同行により元弥栄小学校を表敬訪問された。

当時お世話になった元弥栄村の方々と過去のことをお互いに反省し、今後友好を深め、文化経済の交流などに努力していることを付記する。

（弥栄会長 藤巻 禮四郎）

## 忌まわしき戦禍、引揚げの途

北海道 荒木直哉

私は明治三十九年八月二十三日山形県西村山郡川土居村（現在西川町）で出生しました。生家は半農半雑仕事で、父は建具職や屋根の茅葺き職などの雑仕事を請け負ってやっていた。

父が日露戦争当時兵役にあって、満州へ出兵の命令が下り、朝鮮に渡り満州を目指したが、たまたま仁川

と言う所で大雨による洪水のため足止めとなり、そこから先に行かれず戦争が終わり日本に戻ったという話を私は聞かされていた。「満州には是非行ってみよう」と思っていたのに行かれず残念だった。おまえは是非満州へ行け、そして俺の夢をかえしてもらいたい」と父の方が積極的であった。

私は昭和二年山形第三十二連隊に入隊し、半年ほど経ったころに中隊の中で、満州派遣兵志願の募集があった。中隊から五人志願者があり、一緒に満州へ行くことになり、昭和三年満州独立守備として新京市の南に位置する吉林省「郭家店」という所の部隊に配属された。この守備隊は山形、秋田、岩手、青森など東北出身の兵士によって編成されていたが、幹部は関西方面出身者が多く「お前たちの東北弁は聞いていてもさっぱりわからない。少し標準語を勉強して覚えろ」と毎日二時間ぐらい勉強させられた。自分たちの大阪弁を棚にあげて、我々だけに押しつけの勉強をさせるなんて、今の世の中では考えられないことであった。この守備隊当時に日露戦争戦跡巡りという名目で、一週間かけ

て奉天・大連・旅順などを見てまわったことがあり、後に移民第一歩のときや、引揚げの折の大連での生活で地理を知っていたことが役に立った。

昭和五年満期除隊となり帰郷する。入隊前は父の仕事の手伝いで建具作りや、茅葺き屋根の葺き替えの手助けをしたが、軍隊で馬の蹄鉄工の仕事を覚えたので、これで生計を立てていこうと考えた。当時、故郷の西川町付近で「三山電鉄」という鉄道を建設中であった。三山とは月山・湯殿山・羽黒山のことと、ここに詣でるため利用する軌道を建設することだった。夏冬を通して工事が行われ、加えて山手の方ではダム建設工事も進められていたため、馬車を使った作業が盛んだった。このころの運搬は専ら馬車だったが、県外からも多くの馬車屋さんが働きにきていた。

このように馬車として、馬は重要な運搬の要の時代だったので、蹄鉄工として立派に暮らして行けると確信し、大江町左沢あてぎわの蹄鉄工場へ見習いに行き修業を積んだ。間もなく父に蹄鉄工場を建ててもらい独立して開業したが、電鉄建設の工事が終わり、馬車挽きの仕

事がなくなつたため、馬の数が激減し、蹄鉄の仕事もさっぱりだった。乗馬用の馬と農耕馬はいたが、乗馬用は鉄は不要、農耕馬はツメ切りだけで、それも出張しての仕事だった。そのうちに自動車が進歩するようになり、ますます馬の時代は不況になった。このまま蹄鉄工を続けても仕事がないのではどうにもならぬと見切りをつけ、一年半ほどで仕事をやめ工場を閉鎖したのである。

#### 渡満の動機と状況

ちようどこのころ「満州に行こう」という奨励の話があちこちで始めていた。当時、農村はとにかく不景気であった。地元の仕事はなく、やむを得ず他県に働きに出て帰ると、地元の人たちに「あいつは渡り者だ」と言われ、青年団の会合に出ても話が合わず、除け者にされてしまう。なるべく外部に働きに出るのを控えるようになっていたが、女子は製糸工場へ働きに行く者が多く、小説で書かれているような悲しい事実も見たり聞いたりした。

村の青年団や女子青年団を集め、「拓け満蒙、行け

大陸」と盛んに満州進出の講演会が開かれたりした。山形県自治講習所の前所長加藤完治先生が講演にこられ、「農村の二・三男対策が甚だ心配である。このまま放置すれば近いうちに必ず暴発することになるぞ」と話があったり、山形連隊当時の上官だった三角中佐が来村して、「今こそ若い諸君が進んで満州開拓に行くべきである」と勧誘されていた。このような時代背景の中で満州独立守備隊勤務で満州を知る私にとって、満州開拓の事業に運命を託す決心を固めつつあったのです。そしてこの満州行きに参加することが、常々父が話していた「満州に行って俺の夢をかなえてもらいたい」との願いにこたえられると思つたのです。

しかし、ここで大きな悩みがあった。この満州行きには渡航費、食費、宿泊費など八十円。渡満後、北大宮滞在費百二十円。合計二百円の自己負担金を用意せよとのことだった。どうしても全額が用意できないば、八十円だけは用意するよにとのこと。出発までに工面しなければと思ひながら父に言い出しかねてた。締切りの期限が近づき、一大決心で父に打ち明け

たところ、一とき考えていたが、「よしわかった。用意してやるから行くがよかろう」と承諾してくれた。有り難くて手を合わせ父や家族に感謝した。

茨城県友部にある「日本国民高等学校」でしばらく教育を受け、昭和七年六月下関から船で釜山に上陸、朝鮮を北上、鴨緑江を渡り奉天の近郊に開設された、日本国民高等学校北大宮分校に入ったのである。ここでは友部から引率してきた幹部の野々山先生、酒井章平先生、それにこの後第一次武装移民団の農事指導員として、私たちと行動を共にした佐藤修先生が、私たちの教育にあたった。三回にわたり約七十人が北大宮分校に入り、先遣隊としての教育を受け、十月に到着した本隊と北滿の佳木斯に向かったのである。本隊がくるまで分校の風呂場作りや、炕か(オンドル)造りなど、酒井先生、佐藤先生と共に汗を流した。そして昭和七年十月中旬、ハルビンから松花江を船で下り、佳木斯に移民の第一歩をしるしたのである。

#### 弥栄村での生活状況

昭和七年十月十五日佳木斯上陸。一冬を佳木斯市街

警備で過ごし、翌八年春、永豊鎮(後の弥栄村)に入植した。当初は治安が悪く、農耕をやりながら反日軍の討伐に参加したりで、五年がアツと言う間に過ぎた。この間に妻をめぐり、やがて子供も生まれた。我々北大宮屯のすぐ隣接した所で花崗岩の出る所があって、石山と称していた。弥栄村農建組合がこの石材掘出しを請け負って事業を進めていたが、近隣ということで大滝五助君が現場監督の依頼を受け、働きに出たことがある。監督と言っても馬車積込みの監視や台数の確認などであり、総監督は軍から鳥井という人がきていた。常時五十人ぐらいの満人労働者が、人力で馬車に碎石を積み込むのである。そして弥栄駅まで運搬し、そこで一日四台、貨物台車に積み、湖南宮(千振)に送った。飛行場建設工事に使うのだと言ったが、鳥井氏の命令はいつも「もっとたくさん出荷せよ。もっと早く積み出せないのか」と言うのが口ぐせであり、我々は絶えず反発していたものだった。

一時期このように外部で稼働したこともあったが、我々の北大宮屯八戸の組は、皆農業に一生懸命努力し

ており、終戦近く応召されるまで平和に開拓に邁進していたのである。

### 終戦直前から引揚げまでの状況

戦況がますます厳しくなってきた昭和二十年七月、ついに私にも召集令状が届いた。このとき弥栄村から数人の仲間が応召したが、吉林省敦化三三六六部隊（富永部隊）に入隊したのは私だけだった。山形県出身だという石山元一伍長と一緒にあったが、この石山伍長は最後まで行動を共にした、忘れることのできない人であった。敦化には私の入隊した部隊のほかに航空隊の飛行場があった。私は病馬廠勤務を命じられたが、満馬八頭、将校用乗馬二頭がいただけで、毎日何もすることがない状態だった。中隊長は斎藤中尉、ほかに佐藤少尉、井上少尉ともう一人の下士官は曹長で、満拓佳木斯出張所の職員で、弥栄組合の江口辨重氏を知っている人だった。

ある日、将校が山の陣地まで馬でやってきて、「終戦になった」と知らされた。それから二日ほど何もなく過ごしているうちに、幹部連中の姿が見当たらなく

なり、敵（ソ連人か満人のことかわからぬまま）が入ってくると危ないからと、敦化川の橋のためとに食糧や物資を集積し移動待機したが、指揮する者もいないため、次第に散り散りになり、勝手に解散する状態になってしまった。しかし、私たちの班十四人は行動を共にしていたが、特に石山元一伍長と水井氏は、最後まで一緒だったのでよく覚えてる。水井氏は興農合作社の社員で、獣医の資格を持った人でしたが、この敦化に同じ会社の出張所があり、まだ社員が残っていたので、水井氏の世話で食糧や物資など持てるだけ持って、その出張所にとりあえず入居することになった。

そのうちに居留民会が結成され、敦化川の川原に各地から避難してくる人たちを集結することになり、日が経つにつれ増えて約二千人ぐらいが集まった。石ころだらけの川原に設けた集結所は、建物があるわけではなく、川の水があるだけだった。本当に悲惨な光景で数多くの犠牲者がでたことが想像されるのである。このころ、既にソ連軍が進駐して興農合作社の施設も接収されていたが、倉庫内には終戦前に集荷した農産物

(穀類はない)があつたので「これは我々が集荷した  
ものだから所有権がある。一部を持ち出すから」とソ  
連兵の許可を得て、ワラビを持ち出し食べてみたが、  
さっぱりおいしくなかつたことが記憶に残っている。

興農合作社の社員も「もうここにおいても仕事はないの  
だから、仲間に入れてください」と私たちと行動を共  
にすることになった。奥さんと子供二人だと思つたが、  
この後しばらく一緒だったのに、途中のどこかで離れ  
てしまい、消息はわからなくなつてしまつた。

そのうちに情勢が不安になり、このまま興農合作社  
の事務所にいるのは危険だと判断し、敦化川川原の収  
容所に移ることにした。そして二日ほどたったころ、  
富永少将(部隊長)がきて、兵士たちを集め訓示があつ  
たが、話を聞くところではなかつた。その後、将校た  
ちはどこかへ行つてしまつたが、後になつて聞いた話  
では、あのままシベリアへ連行されたのだろうといふ  
ことだった。後藤勇吉(新潟屯)(桶屋)、今義一(青  
森屯)、千田貞夫(宮城屯)、半谷一衛(太平福島屯)、  
大泉竹次(山形屯)など同士の諸君だった。

はじめは彼らの部隊と後から集結した私たち一般人  
は(私たちは一般人の中にまぎれ込んだのです)、自  
由に行き来できたが、しばらくして仕切柵が設置され、  
ソ連兵が監視するようになった。半谷君とはその柵の  
所で別れるまで度々会い「おい荒木君、お前もこっち  
の部隊の方へ入れよ。軍隊だから食うことはなんとかな  
るぞ。これから一緒に行動した方がよいと思うがナ」  
と誘われ、どう判断したらよいか迷つた。逆に半谷君  
もそこから出て私たちに加わつた方がよいかもしれな  
いと迷つていたようだった。しばらくして半谷、後藤、  
大泉たちの組は敦化から姿を消したが、そのときは三  
メートルもある竹竿をかつぎ、何百人もの兵士が移動  
するのを見て、その竹竿は何のためなのか見当はつか  
なかつたが、忘れることのできない異様な光景だった。  
そしてこれがシベリアへ抑留される人たちとの別れ道  
だったが、柵のこちら側にいた私たちも移動すること  
になった。

私たち避難民を監視していたソ連兵が、役目を怠け  
ているような状況が見受けられ、居留民会の判断によ

り移動することになったのである。ハルビン方面か南の方面か議論の末、私たちは新京か南方を目指して行動することになったが、汽車に乗る見込みはなく徒歩での移動であった。一般避難民と一緒にあったため、子供たちが大勢いたが、大人たちは食料を背負い、またその上に幼子に乗せ、首から袋を吊るし子供の手をひいて歩く姿は、悲惨なものだった。女・子供はだんだん遅れてしまうので、何とか助けながら逃避行を続けたが、最後には体力のある者だけが残ったのは当然であり、いつの間にか離れ離れになってしまい、我が班の十四人だけが集団で行動するようになっていた。このような逃避行の中で体力のない女、子供が命を失ったもので、後に大きな問題を残す日本人残留孤児は、こうした背景の中で引き起こされたものである。

ある駅で満人の駅長との交渉で、金と毛布を提供すれば汽車に乗せてもらえることに話がまとまった。一人当たり四円か四十円か金額は忘れたが、とにかく金と毛布（要求どおりの金がなく毛布を多く渡した）を渡し列車に乗せてもらうことになる。この駅の付近一

帯に開拓団があり、駅のそばには周囲が土塀の開拓団本部があり、中に大勢の家族がいたので水が欲しいと申し入れたが、他人は中に入れないと断られ、水を求めることはできなかった。その後どうなったか心に残ることであった。新京に向かうか、ハルビンに向かうか意見でもめた。私は少しでも南の方がよいと主張して、結局折り合いが付き、新京に向かうことになったが、列車に乗る直前に駅舎を取り囲んだ満人の大群に、毛布や食料などの持ち物のほとんどを身ぐるみがされ、略奪されてしまった。間もなくソ連兵がきて銃を発砲したため、満人たちは逃走したが、本当の着の身着のままになった私たちの一行でした。幸いにも早いころに皆が軍用夏服を二枚ずつ着ていたので、寒さは何とか防ぐことができた。

次の日の朝新京に着いたが、終戦を聞かされてから何日経ったのか、今日は八月何日なのかさっぱり分からない。一緒に列車に乗ったのは同班の十四人であったが、途中で二人いなくなり、新京に着くとほかの人も知人を頼ったり、探しに行くと言って別れ、石山、

水井の両氏と私の三人だけ残り、新京駅近くの学校に入りこんだのである。

翌日から、新京三中<sup>みやがひ</sup>井百貨店が情報連絡所になっていると聞き訪ねてみた。入り口を入ると黒板があり「○○開拓団○月○日どこへ集結した」：うんぬんとか、いろいろの連絡文がびっしりと書かれていたが、知りたい弥栄村の情報は無かった。毎日連絡所に通って情報を探し求めていたが、その間何をしていたのか、どうやって食べていたか全く記憶がないのです。

多分半月近くこんな生活をしていたある日、街頭で弥栄村山形屯の人たちに出会ったのである。地獄で仏に会った思いでお互いにびっくり「よう！元気でいたのか。今どこにいるんだ。今までどうしていたんだ」と会話を交わし、山形屯の人たちが収容されている新京公発公社の寮に案内してもらった。

ここには、弥栄村山形屯のほかに西弥栄開拓団の人たちが大勢収容されていたが、私の探し求めている北大宮屯の人たちはここにはいなかった。話によれば新京で一たん列車は止まったが、また南方に向けて発車

したようだったから、大連方面ではないかと言う。山形屯の近藤忠雄、大黒豊、広谷幸一郎の諸君がいたし、大泉竹次君は敦化で別れてシベリアに連行されたのか、家族だけだった。広谷君に「いい所へきてくれた。仕事が多くて忙しいから是非手伝ってくれ。一緒に働いて我々と共同の生活をしようじゃないか」と誘われ、広谷君の元で大工仕事の手助けをした。昔、父の建具職の手伝いをしたことも役立つと思ひ、渡りに舟と広谷君に従って働かせてもらい、かわりに食料の手配などは共同でと、仲間入りしたのである。

三中井の情報連絡所に足を運び、相変わらず妻子のいる弥栄北大宮屯の消息を尋ねていた。そのうちに水井氏が「弥栄のことなら満拓の中村孝二郎先生がついているじゃないか。きつと知っているだろう。住所は私が知っているから一回訪ねて見た方がよいぞ」と勧めてくれたので、早速中村先生宅を探し訪問した。満州国皇帝の宮殿を建築中だった場所のすぐそばに住居があり、全滿各地から先生を頼ってきた人（主に若者）が十人ほどいたが、満拓関係や部下の人らしかった。



中村先生の話では、「弥栄は新京で下車した組と、大連まで下った組に分断されたようだが、はっきり大連まで行き着いたかどうか確認できていない。多分間違はなく大連に着いているでしょう」と言う返答でした。

私は何も悪いことをした覚えはないのに、何か悪事を重ねて逃げまわっているような感じで、二カ月半も過ぎていたのでした。とにかく大連に行こうと覚悟を決めたとき、栃木屯の斎藤久君に「大連に行く汽車の便があるから一緒に行かないか」と誘われ同行することにした。集まった者の中に同じ北大宮屯の大滝五助、菅野喜久雄、秋田屯・佐々木孝之助、群馬屯・大沢勝治、岩手屯・高橋源藏、太平屯・滝沢正勝などの諸君がいた。

大連に行くことになり新京まで生死を共にしてきた石山、水井の両氏に別れを告げて出発したが、奉天に着くと全員ここで降ろされてしまった。春日小学校に入れられたが、避難民がいっぱいで廊下に寝るしかない有様だった。翌朝起きたら隣で寝ていた人にムシロが掛けてあり、何かと思ったら昨夜おそく死んだと言

う。見れば中尉の襟章をつけた兵隊だったが、死んだ者を見ても何の反応もなくなった自分が驚きだった。

開けても暮れても死んだ、亡くなったと見たり聞かされたりで、もう悲しさも涙も失ってしまったのである。

次の日、再び貨車に乗せられ大連に向かったが、ここで弥栄村の同志が大勢一緒になった。朝鮮方面の部隊に入隊した者がここまで逃げてきたそうで、ほとんどの兵隊が夜寝るときの敷物にするムシロやかまきり吠を持ち歩いてた。列車は貨物車の中には発電機などの機械類が積まれており、旅順工科大学の先生と一緒に一円か二円を出してくださったし、食物もお世話になった。御恩は決して忘れないが、お名前は聞かないでしまった。

三日目に大連の手前の普蘭店フランダンに着いて、身分検査が行われた。大滝、菅野君たちは一旦ソ連軍に身柄を拘束され「ソ連軍使役者である」と書かれたパスポートのような証明書を持っていたので、そのまま通過した。私のほか三人はその証明書を回し持ちで、うまくその

場を通ろうとしたが、とてもそんな具合にはならず下車させられた。私と滝沢、大沢、高橋の四人を残して大滝、菅野君たちは大連に向かった。私たち四人はここで足留めされ、高橋君が持っていた米を炊いて食べる機会を待った。大連はもう目前だから監視の目をくぐって逃亡しようかと相談もしたが、ここまできて危険を冒して万一射殺されたら、何のため今まで苦勞して逃げてきたのか……と考えると、無理はしない方がよいと待つことにした。

一泊した次の日、日本人の駅員が（まだ日本人の駅員が勤務していた）、ソ連軍の軍曹に頼み、許可をもらってくれた。乗せてもらったのが機関車の炭車であり、隠れての乗車のため、炭車の石炭の中へ帽子を頭からスッポリとかぶり、埋まりながら大連に向かった。風が顔にあたり凍るように冷たく、生きた心地がしなかったことが思い出される。

十一月七日、大連に着いてまっすぐ大連実業学校へ向かった。弥栄村の人たちは、私が新京で中村先生からお聞きしたとおり、新京には山形屯、西弥栄開拓団

関係者が下車し、残りの弥栄開拓団は全部大連に南下したのであった。収容所にあてられた実業学校で、私たち北大宮屯は、松田熊蔵家族、大滝五助家族、佐藤賢治家族、渡辺米治家族、斉藤善治家族、鈴木清一郎家族、そして私の家族と子供だけ残った土田吉治の家族で、八戸のうち男は松田君ただ一人だった。今回私と大滝君が家族と合流したが、あとはシベリア行きとなったのか？

応召してからわずか数カ月、家族離れ離れの毎日であったが、いつも無事を祈っていた妻や子供たちとの涙ながらの再会であった。しかし、不幸にも緩化から大連に向かう貨車の中で四男の悟が亡くなり、ようやくたどり着いた大連でホツとしたのも束の間、十日ほどたって次女貞子が死亡した。と妻から詫びるような話を聞かされ妻の胸中を察し、「心配をかけてすまなかった。御苦勞だった」と慰めの言葉をかけるだけだった。

私が応召してからの苦勞を、妻から聞いたところによると、次のような経過をたどって大連まで来たとい

う。八月十一日夜、急に避難命令が出され、翌朝六時までに弥栄駅に集結するようにとの伝達があり、急いで身の回りの整理や財産の処分などを考えたが、とても妻一人で仕切れるものでなかった。加えて北大宮屯は八戸であったが、我が主人をはじめ、六人が応召、男子で残っていたのは五十歳近い松田熊藏さんただ一人だったという。妻は取りあえずの食糧や衣類をまとめ、九歳を頭に五人の子供を連れて弥栄駅に集結した。しかし自宅に銃と弾薬を残してきたことに気付き、急ぎ我が家に戻り銃・弾薬を持ち出し、村公所まで返納に行ってきたと話した。我が家に戻ったときには満人が既に家財道具類の配分をしていたそうで、悔しい思いで我が家をあとにした、と。

朝から夕方まで待たされ、ようやくきた汽車は屋根のない貨車で部落ごとに割り当てられて北大宮屯はほぼ同じ所に入った。しかし人間の本能というか、こんな最悪の状況に会った人はほとんどないと思われ、他人のことなどかわかっていられない、自分がどうなるのか…という気持ちでいっぱいだったようだ。特に幼

子や乳飲み子を抱えた女の人にはとても想像できない世界だったようだ。そしてこの避難行は雨の降る中を三日も走り緩化に降ろされた。無蓋車が雨の中を走るのだからたちまちのうちに雨水がたまり、寝ているわけにはいかず、まことに悲劇だった。あちこちで気が狂ったように叫ぶ人がいたし、子供の血の気がなく、ぐったりしているのを抱いたまま、放心したようになった母親もいた。そして緩化の駅から飛行場の格納庫まで歩かされた。

家から持ち出してきた食物もほとんどなくなって、子供を背負い九歳の子に幼子の手を引かせひたすら歩いた。三時間ぐらい歩いたような気がする。この行軍で今までの疲れが一べんにでて、收容所へ入ると同時に病人が多くでたそうです。長蛇の列というが着の身着のままの人間が、ゾロゾロと連なって行く姿を想像しただけで、悪夢の思いだと涙を流して話してくれた。

この緩化に一カ月ほどいたが、そのうちに、弥栄から最後の動員で応召した人たちが次々と探しあてて家

族の元へ合流した。主人もくるかもしれないと待っていたが、ついに戻らず、もしかと不安にもなった。戦争に負けたという話は緩化で聞いただけで、その他の情報は何もないから、日本の軍隊は一体どうしているのだろうか……どこにいるのだろうか、心配してもどうにもならない。とにかくその日その日を生き、あちこちで子供が死亡し、一日に二十人も亡くなったなどと聞くと、せめて家の子は死なせてはならぬと思ったそうです。

ようやく九月半ば、南の方へ向かって出発することになり緩化を離れたが、この列車の中でついに我が子が発病してしまった。列車の中では病院があるわけはなし、弥栄病院の宇賀神さんからくすりをもらって手当、看病したが、発疹チフスで九月二十日とうとう息を引きとった。奉天に着いたとき、駅のそばの防空壕の中に安置し、弔ってやったが、成仏してくれたかどうかと心に悔いが残っている。山形屯の人たちは新京で下車したが、列車の都合で再び乗車できず、妻たちはそのまま大連まで行った。大連に着いたのが九月

二十四日であった。

すぐ大連実業学校に收容されたが、北大宮屯は一室の中で八家族が共同で、取りあえず過ごすことになった。食うために次の日から働きに出ることになり、埠頭の仕事や洗濯婦、ゴミ収集運搬などいろいろな仕事をした。大連市内の山形県人会や、〇〇県人会などから仕事の話もあり、また衣類などの奇贈もあって助かった。仕事に出るときは子供は同室の松田熊蔵さんに預けて、面倒を見てもらった。松田さんは炊事係として残って、子供の世話も受け持ってくださった。大連に着いて十日ほどたって次女が発疹チフスにかかって死亡した。車中で一人亡くして気落ちしていたのに、更に女の子を死なせたことが、心の痛みになっていたのがよくわかった。早く主人が戻ってくることを心から願っていたと話す妻の言葉に感無量の思いでした。

大連に着き、家族と再会した私は、すぐ埠頭に働きに出ました。日本に本社がある「大阪商船」だったと思うが、大連と日本の間を往復する船舶を多く持った会社だそうです。この会社のドックにある工場に働き

に出たが、職種は鍛工（俗に言うかじや）の作業で、船のスクリーナーやチェーンブロックの修理などが主な仕事であった。仕事にランクがあり、入って初めてのときに四級職であったが、それから五級、六級と上がり、六級は「フイゴ」係で四人一組の作業だったが、十日ほどたつて発疹チフスになり、仕事を休んで再び働きに出たら、またもとの四級に戻されていた。一カ月の間に修理する船の割当てがあり、通常十一隻だったが、仕事が間に合わなくなると残業があり、夜半十二時や午前一時ごろまで作業をした。一日の賃金は日当二円八十銭だったと思うが、残業をすると加算の割合が良かったので、作業はそれほど苦にならなかった。若いときに蹄鉄工を経営しているので、仕事そのものに興味もあつたし、嫌いでなかったのを楽しく働けたと思う。ボロの衣服をまもっていたが、別に差し障りがなく助かった。

このころ妻も埠頭に働きに出ていたが、仕事は船の積荷の数の確認作業とか、いろいろ細かな仕事が多かったようで、あまり「マジメ」にやりすぎて過労働とな

り、体調をくずし休むこともあったが、引揚げ後もその後遺症に苦しめられていたことが後悔されます。

そして一冬越した昭和二十一年五月、長女が病に倒れ、必死の看病の甲斐もなくこの世を去りました。弥栄村をあとにして、避難の一年足らずの間に、我が家は五人の子供のうち幼少の三人を相次いで失ったのです。収容所の裏の転山の石ころだらけの山肌に穴を掘り埋葬しました。この山には、弥栄村の子供たちの亡骸が数多く眠っていることを思うと、一度は供養に訪れたいと願いつつ、今日になってしまった。生き残った三男がその務めを果たしてくれることを願うのみである。

昭和二十一年十二月、ようやく引揚船に乗船、日本に向かって出航するまで、私はドックで働き続けました。召集され終戦と共に逃げのびて一年半、それでも運よく生きて大連にたどり着き、家族と共に日本に引き揚げる事ができたのは、不幸中の幸いであると思う。ただ心に残るのは、弥栄村に一人、引揚げ途中で三人、幼かった子供四人を満州の土に埋めたままであ

ること、一度は訪れて供養してやりたいと思いつつ実行できなかつたことである。しかし弥栄会北海道支部の小野塚さん、小玉さん、松井さん、菅野さんたちが「友好訪中追悼の旅」を計画され、引揚げの途をたどり追悼法要を勤められたことで、悔いがいくらか晴れたと思います。そしてこの引揚げの悲惨だったこと、忌まわしい戦争のあとの空しさを知っている私たちが、労苦の実態を語り継いでいかなければいけないのだと思ふのである。

#### 引揚げ後の状況と北海道開拓

昭和二十一年十二月十八日、山形県の実家に十四年ぶりに家族と共に帰り着いた。終戦直後の混乱期で食糧事情は悪く、いつまでも厄介になっていることは誠に心苦しく、何か仕事を探して働かなくてはと思っていた。山形県庁開拓課を訪ねたところ、芝田という方が会ってくださって、各地の開拓状況などの説明をされた。青森県と北海道に適地があり、弥栄村の同志は北海道釧根原野に入植したと承った。更に引揚げのとき新京でお世話になった中村孝二郎先生が、指導者と

して弥栄村の同志と共におられることを聞き、「よし、俺ももう一度開拓に挑戦だ、北海道へ行くぞ！」と決心したのである。

そのうちに大泉竹次君がシベリアから帰ってきて私を訪ねてくれた。大泉君もこれから先どうするか、北海道へ一緒に入植しようかと真剣に相談した。結局、山形県庁へ出向き協議の上、北海道釧路管内標茶町に入植することに決めたのです。後で北大宮屯の伊藤忠太君も一緒に入植することになった。北海道へ行くにも開拓をするにも資金がないのだから、まず資金作りだと出発までの間に忙しく働き資金調達に奔走した。

山形を出発し三日がかりで、昭和二十二年七月十四日北海道標茶町に着いた。家族は私、妻それに満州から生き残ってきた二男、三男の計四人だ。大泉君、伊藤君、私の三人が弥栄村関係で他の開拓団の者四人と計七戸が一行であった。取りあえず入植予定地の一隅に藁舎を造り共同宿舍とし、大家族集団の共同生活が始まった。雪の降るまでに丸太積みまきの仮小屋三戸を建設し、分かれて入居した。食糧不足で踏ふみなどの山菜で

空腹を凌いで働いた。

一年後に土地配分が決定、各自が個人の仮小屋を建築した。住居とは申せ何とか雨露を凌ぐだけで、冬は寒さ厳しく吹雪になれば、隙間から雪が舞い込む有様だった。だれかが言った。「食う物も乏しい。寒さも厳しい。だが恐ろしい思いをしないでだけ気持ち楽だ」と言う。治安面で心配ないことが平和である証と言えましょう。

このようにして入植当初の生活は、苦しみの中にも将来の目標を見据えて、一步一步前進したのである。最初の十年は苦闘の連続、次の十年は低迷期、そして次の十年は酪農振興に全力を注ぎ、ようやく酪農経営安定期に到達し、今日に至っている。しかし、自由化の波、国際化の嵐の中でまことに厳しい現実に直面していることも事実である。

我が家の経営は息子の時代から孫の代に移りつつあり、現在の経営規模は次のとおり。

乳牛頭数百頭、土地面積六十五町歩

### 【執筆者の横顔】

荒木直哉氏は明治三十九年生まれで今年満九十歳を迎えられました。昭和七年第一次武装移民弥栄村開拓団員として渡満され、幾多の困難を克服し、満州開拓の偉業に奮闘努力されていた昭和二十年七月応召。吉林省敦化の富永部隊に入隊、間もなく終戦となった。幹部不在となった部隊の中にあり同班の兵士と共に、敗戦直後の混乱の中を逃避を続け、運よくシベリアへの連行は免れました。

二カ月半にわたり敦化から新京へ、更に奉天へと野宿を重ね雨風の中を転々とし、ようやく家族の避難先を探しあて、昭和二十年十一月初旬、大連にたどり着き家族と再会を果たされました。この避難行動中は絶えず適確な情勢の把握と勇氣ある判断により、生死を分かっ境遇にもひるむことなく行動し、無事大連に到着できたものと考えられます。

今回の引揚げ労苦体験記の執筆に当たり、その逃避行の細部にわたる記憶の正確なることに驚きました。更に、その行動は熟考された思慮と冷静な判断に基づ

くものであり、記録の中から十分窺い知ることができません。卒寿を過ぎ、なお豊饒ゆたかとして丹精こめた野菜栽培と、ゲートボール同好会の練習や大会に欠かさず参加する、その体力と精神力には心から敬意を表するところです。

満州開拓の先駆者、第一次武装移民の勇者も年ごとにこの世を去り、歴史の生証人も数少なくなり、誠に心寂しい思いであります。荒木氏はその中であって、満州独立守備隊、奉天北大宮分校、弥栄村開拓団、そして終戦逃避行と激動の歴史を体験された方であり、後世に語り継ぐものとしてこの一編を記録されたのであります。

満州から引揚げ後、再び開拓に夢をかけ現在の地に弥栄村の同志と共に入植し、語り合い励ましあって今日の弥栄部落の基礎を築かれた「拓魂」即ち弥栄魂には、今更ながら「明治の男たち」という言葉があてはまる感じます。入植後「弥栄開拓農業協同組合」設立と同時に役員に就任され、爾來長年にわたり組合及び部落の運営と発展に貢献された功績は、誠に大なるも

のであります。

最後に一言、残念なことに、平成八年七月四日妻みえさんが死去されました。引揚げのときの残酷なる労苦が災いし、長年にわたる後遺症に苦しめられておられたと聞きました。行年八十三歳の生涯でございました。

一言申し添え謹んで哀悼の意を表します。

(弥栄会副会長北海道支部

支部長 小野塚 芳二)

私は終戦にこう対処した

岩手県 堀 忠雄

昭和二十年八月十六日、満州北安省通北県副県長本田正晴氏より私だけ特別電話召集を受けて、「日本帝國無条件降伏」のことを知らされた。県公署では、そのとき日系、満系官吏の合同離散会を開いていました。副県長に案内されてその離散会に出席したら、井上開